

第183回 番組審議会

1. 日 時 平成21年6月9日 (火) 12:00～
2. 場 所 メトロポリタン盛岡NEW WING 3F 「星雲東の間」
3. 委 員 委員総数 13名
出席委員数 11名 (欠席委員数 2名)

○ 出席委員 (敬称略)

中村 慶久 (委員長)
椎井 一意 (副委員長)
—以下50音順—
久慈 浩介
斎藤 雅博
東海林 千秋
菅原 正二
中川 真
中原 祥皓
村上 幸子
八木橋 伸之
吉田 浩次

○会社側出席者 (6名)

内海 幸司 (代表取締役社長)
佐藤 滋樹 (常務取締役)
小原 忍 (常務取締役)
藤澤 利憲 (常務取締役)
前田 秀男 (取締役技術局長)
一戸 俊行 (報道局長)

○事務局 村田 重昭

4. 議 題 FNSドキュメンタリー大賞

「がけっぷちナースの純真 ～乳がんから始まった日々～」

平成21年5月30日（土） 16:30～17:25放送

5. 議 事 概 要

今回は、FNSドキュメンタリー大賞「がけっぷちナースの純真 ～乳がんから始まった日々～」について審議した。

各委員からは「乳ガンにも関わらず、明るく元気な主人公の姿に勇気を貰った。」「極力画面の演出を押さえ、音楽を使わない制作手法に共感した。」「乳ガンにかかっている、自分の命すら危ない主人公が、看護師として担当の患者さんを癒している姿に感動した。」などの意見が出た。

また「主人公が受けている抗ガン剤治療をもっと詳しく知りたかった。」「主人公の入退院の時期が、時系列的に分かり難かった。」との意見があった。

6. 議 事

○事 務 局

ただいまより第183回番組審議会を開催いたします。

本日まで出席の委員は11名、ご欠席は斎藤純委員と役重委員のお2人です。また、3月末でご退任された谷口委員長に替わり、新しく委員長に就任されました中村慶久様がお出席されています。中村新委員長は、4月より谷口学長の後を受けて岩手県立大学の学長を務めておられます。中村新委員長の略歴につきましては、委員の皆様のお手元にお配りしておりますので、参考までご覧下さい。

それでは、中村新委員長よりひと言ご挨拶をいただき、その後に中村委員長の議事進行によって議題に入らせていただきます。今回の議題は、5月30日（土）に放送されました「がけっぷちナースの純真 ～乳がんから始まった日々～」です。本日は番組制作にあたった一戸報道局長が出席しております。

それでは、中村委員長よろしくお願ひいたします。

○中村委員長

皆さん、ご紹介をいただきました岩手県立大学の中村でございます。どうぞよろしくお願い致します。私はこのような番組審議会は初めてでございます。NHKの技術関係の審議会は担当させていただいていますが、番組の方は初めてでございますので、この会が順調に進行しますようご指導ご協力のほど、よろしくお願い申し上げます。

私は岩手出身で、大変久しぶりに50年ぶりで戻ってまいりました。戻ってきて地元制作の番組の審議・批評をやらせていただくということで、非常に楽しみにしております。

それでは、議事に入りたいと思います。まず一戸さんから、今回の番組の背景や感想などについて説明をお願いいたします。

○一戸報道局長

今回番組を担当しました報道部の一戸です。本日はよろしくお願い致します。

始めに良いお話からご報告させていただきます。今年3月に放送いたしまして、番組審議会でもご意見をいただいた「春高バレーコーチングキャラバン」で取り上げた高田高校女子バレー部のその後についてです。春高バレーでは準決勝で負けたのですが、一昨日行われました高校総体で見事優勝いたしました。春高バレーで負けた盛岡女子高校にフルセットの末逆転で勝利し、奈良で開催されるインターハイに出場が決まりました。報道部としてはクルーを派遣して取材・応援をしたいと思っております。

さて、本日の議題の番組は、FNSドキュメンタリー大賞ノミネート作品です。このコンテストは番組制作力の向上などを目的に、フジテレビ系列各局が制作することになっており、今回で18回目となります。

この番組は、私自身がディレクター兼プロデューサーということで制作に当たりました。現在は報道部ですが、私の社会人としてのスタートはディレクターでした。最近はプロデューサーという立場でこの会に参加させていただくことが多いのですが、今回のように没頭してドキュメンタリーを作るのは、12～3年ぶりです。いつもはディレクターが作った番組に対して簡単に「あーだ、こーだ」「これはいらない、あれはいらない」「何を考えているの」というような話をしているのですが、いざ自分が作るとなると、そうはいかなくて、実際に番組を作るのは大変なことだな、プロデューサーとして勝手なことを言っていたなと思えました。これからはディレクターに優しくしたいと思っております。

今回の番組のそもそもの始まりは、一昨年12月に岩手出身の乳ガンの看護師さんが講

演会をするというパンフレットを見たことがきっかけでした。いつもなら他の部員にそのパンフレットを渡してニュースで紹介するところですが、皆なにかと忙しかったことと、自分でも興味があったので、自分で会って話を聞こうというところから始まりました。

その講演会を聞いているうちに、番組にしたいという気持ちになりました。その後去年の4月頃ですが、報道部初のレギュラー番組「MITスーパードキュメント」を立ち上げようとしていた時期に、その最初の企画がボツになる可能性がありました。その場合は乳ガンの看護師の企画を自分で制作して替わりの番組にしなければならないかな、と思っておりました。しかし心配した「MITスーパードキュメント」の第1回は、昨年委員の皆様にもご審議いただいたベアレン醸造所のタンク破裂事故を扱った番組でしたが、結局放送できることになりました。結局乳ガンの看護師さんの企画は、長期的に取材することになり、1年後の放送を目指して準備を進めました。正確には1年4ヵ月ほど取材しております。

今回は、良い番組を世に出したいという気持ちはもちろんなのですが、自分の考える「ドキュメンタリーは何か」ということに結論を出す番組であると思い、制作に取り組みました。

そのような訳で無謀ではありましたが、音楽を一切入れないことにしました。編集につきましても、ふわっと映像が替わるというような編集上の様々な効果があるのですが、それも使わないことにしました。字幕も最低限必要なものだけにとどめました。そのため、多少古臭い感じのドキュメンタリーになっているかもしれませんが、淡々と進んでいるという部分もあったかもしれません。内容的にはガンの番組だからといって必要以上に暗くするとか、煽るようなことは考えず、日常のなかのドラマが表現できれば良いと思っておりました。

実際取材をして分かったことは、看護師として働いていた山内さん自身が患者となったことで、患者さんがして欲しいということを山内さんが学び、そのことを担当する患者さんに返していく。そうすると患者さんが山内さんから元気を貰って、山内さんも患者さんから元気を貰うという、不思議なサイクルのようなものを感じました。私はこういうことが人が生きるために大事なのではないかと思いましたし、支えあって生きるということを感じましたので、それを番組に少しでもにじませたいと思いました。

何を番組で言いたいのかということ、ひと言で言い表すことは非常に難しいのですが、番組を見た人が、一人でも生きることについて考えるきっかけになればいいなと思って制作しました。

取材現場が精神科病棟でしたので、患者さんがその方と分からないようにモザイクを入れたり、患者さんの名前が分からないようにナースステーションのホワイトボードやパソコン

の映像にもモザイクをかけるなど慎重な対応を心がけました。

去年、この番組の取材を始めたころから、4月は取材機器のHD化、6月は地震、7月も地震、その後川井村の少女殺害事件、平泉の世界遺産登録、さらに10月には宝くじ殺人事件と岩手にとって大きな災害・事件が続き、ニュースの取材は全員体制でしたので、その期間はこの番組の取材も、なかなか私が行きたい時に行けるという状況ではなかったことが辛かったなと思います。

とはいえ、私のような立場では出来ないような機会を今回はいただきまして、本当に感謝しております。

本日は皆さんにいろいろなご意見を伺い、今後の番組作りに活かしていきたいと思いますので、よろしく願いいたします。

○中村委員長

どうもありがとうございました。それでは委員の方々からご意見を伺いたしたいと思います。中川委員からお願いいたします。

○中川委員

一戸局長、お疲れ様でした。最初にお伺いしたいのですが、1年4ヵ月の間に山内さんに対する取材というのは何回くらいされたのでしょうか？

○一戸報道局長

ざっとですが30回です。これは多分少ないほうだと思います。取材が飛び飛びになってしまい、行けるときに行ったという感じなので、普通であれば50回くらいになるだろうと思います。今回の取材テープは90本ほどになります。

○中川委員

ありがとうございました。私は、先ほど一戸局長のお話にもありましたが「支え、支えられる関係。」というのが、まさにキーワードではないかと思いました。

もともと山内さんはしっかりした方なのだろうとは思いますが、“乳がんから始まった日々”というタイトルにもあるように、病気を通してさらに人間的に成長していくという過程が良く分かりました。看護師を元気にやっていた時は「患者の皆さんに対しての対応が良

くなかったのではないか。」とご自身でも振り返っていらっしやいましたし「そのままだったら、もしかしたら傲慢な嫌な人間になったかもしれない。」とまで仰っています。そのような山内さんの発言は、病気を体験したということの「重み」だと感じました。

ドキュメンタリー番組についてですが、世の中に全然知られていない人を探して紹介すれば、エピソード全てが驚きになるという可能性があるわけですが、本を出したりブログを書いたり、既にいろいろなところで語っている人をこの時期に取り上げるということは恐らく大変だろうと思います。

そういう意味で言うと、番組に出てきたリサちゃんというご飯があまり食べられない患者さんとのやりとりは、新しい要素として光っていたし、そのやりとりの流れを見ていくなかで、最後に「支え、支えられて」ということの本当の意味が伝わってきて、そこに私はとても感動いたしました。

番組を見ると、山内さんの病気が良くなったり少し悪くなったりしていて、その時系列的な部分が少し分かりづらかったのですが、そういう部分をカバーするだけの感動があったので、とても良かったと思います。

○中村委員長

ありがとうございました。それでは続きまして菅原委員からお願いいたします。

○菅原委員

一戸さんの説明にあるとおり、自分が病気をしたからと言ってそれに甘えないで、何かしてやれるのではないかと思うことが一番大事なことで、今回のテーマはそこに尽きると思うのです。

私も過去いろいろな病気をやってきました。病人は病気に甘えて自分のことだけを考えがちなのですが、もっと人に何かしてやれるのではないかということで、とても良いと思いました。

山内さんは、今現在もお元気なのですか？（一戸：「はい」）「乳がん健診はお早めに」というCMに出ているのも彼女ですよ。（一戸：「はい」）昨日、以前に慈恵医大の総婦長さんだった方とお会いしたのですが、その方も山内さんをご存知でした。けっこう有名なのではないですかね。

音楽がないというのも良かったですね。最近はおどろおどろしい音楽を使いすぎるので、

音楽がなかったことによって、かえってすっきりして良かったです。

エンディングのシーンが良かったですね。病院の廊下を映してずっと入って行って、そこで終わったところが、凄く良いと思いました。

一戸さんが仰ったテーマである「自分が病気をしても、何かまだやれることがあるじゃないか。」ということを知らせたということで、凄く良い番組だったと思います。

○中村委員長

ありがとうございました。それでは次に、八木橋委員にお願いいたします。

○八木橋委員

私も見て大変良いと思いましたね。以前見た「萬代館」の番組以来の感動があつて、特に良かったと思います。

ひとつめですが、全体的な構成からすると、本人に的を絞って自然な流れを淡々と撮っていたように思います。音楽もないし凝った画面の切り替えもないと一戸さんは言われたけれど、古臭いというよりむしろその方が番組を見易かったですね。あまりごちゃごちゃ場面を切り替えられるより良かったと思います。ただ山内さんの病気が良くなって、そこで勤務先の病院に戻ってというようなエピソードが、どの時点のことなのか若干分かりづらかったかなと思いましたが、良く考えれば分かることなのでそれほど大きな問題ではないと思いました。むしろ自然に見えて見易かったと思います。

ふたつめは題材が医学で、しかも非常に分かりやすいテーマだったことです。医者の闘病記のようなものはたくさん出ていますが、看護師の側から見た番組というのはあまりないのではないかという気がしますし、番組制作の視点が良かったと思います。題材としても私は良かったと思いました。

三つめは山内梨香さんです。特に自分が苦しいときに患者さんを励ますというところに、非常に感動しました。職業柄でやれると言えればそれまでですが、実際にはなかなかできることではないと思います。

個別的な事で私が惹かれたのは、冒頭に出てくる「なんで私なんだろう。」という言い方でした。この間、私の友達に膵臓ガンが見つかった者がいるのですが、医者にあと半年とか1年とか言われたと言っていました。その友達と会った時に彼は「なんでおれが。」と言っていました。ガンになった人は皆「なんで私が・・・」と言うわけですが、それがひとつの共通

項なのだろうと思いましたが、ガンになった人の気持ちとして非常に感じるものがありました。

山内さんが実家に帰ったときに、親が「なんにもしてやれない。」と言っていました、親とか兄弟は皆そう言うのですね。私の遠い親戚がこの間ガンで亡くなったのですが、やはり親兄弟が「なんにもしてやれなかった。」と言っていました。医者に任せるしかないのも、それはそうなのですが、ガン患者の周りには「なんにもしてやれない。」というのは、ひとつの共通の事だというのが認識できました。

フィアンセと一緒に記念写真を撮るシーンで山内さんが「似合うね、私たち。」と言ったのですが、ちょっと姉さん女房的な女性主導の雰囲気が出ていました。その言葉が2人の関係を良く表していて非常に面白かったです。

先ほども話が出ていましたが、自分が死にそうなのに拒食症のリサちゃんを励ますという場面がありました。看護師というのは職業柄そのように訓練されているのか、本人が自然とそうしているのか、なかなか難しいですね。自然にそうしているのなら、本人の人間性の問題だと思いますし、なかなか出来ることではないと思います。

個別に見ると、いくつも感動的な場面や言葉がたくさんありましたが、考えさせられることがありました。誰でもガンになる可能性はあるわけですし、もしがんになった時に誰でも山内さんのように淡々と過ごせるかと言ったら、私自身は無理な面もあるかなと考えてしまいます。そういう意味では当初戸さんが言われた「考えるきっかけになれば」という目的は、充分果たしたのではないかと私は思います。

○中村委員長

ありがとうございました。それでは次に、齋藤雅博委員にお願いいたします。

○齋藤雅博委員

番組を見終わって、まず「頑張れ」「ガンを克服して」と言いたくなる心境になりました。ガンと闘いながら自らの職業である看護師としての日々の様子、日常を捉えると先ほど戸さんは話しておられましたが、まさしくそういった様子を伝えるドキュメンタリーでした。山内さんの前向きな生き方は多くのガン患者たちだけでなく、様々な人たちに共感を与えたのではないかと思います。やはり印象的だったのは、彼女の笑顔、特に患者さんに接するときの笑顔、生き生きとした様子が本当に印象的でした。

先ほど「支えられる」という言葉が出ましたけれど、親に支えられ、職場の人に支えられ、恋人に支えられ、支える患者さんにも支えられ、懸命に生きている山内さんの姿は感動的だったと思います。

この番組を見たら、誰もが頑張らなくちゃと思わずにはいられなかったんじゃないかと、そういう意味では凄く元気づけられた番組だったと思います。

山内さんは「笑い療法士」の資格をとったようですけれど、そこまでして明るく患者さんに接しようとする姿、さらにメイクやネイルアートなどの患者さんへのスキンシップ等々、これらが本当は看護の本質だと思うのですが、山内さんの言うように今の医療のなかではそれが出来ない、それが看護の現実、ということもあってその辺もいろいろ考えさせられました。

看護専門学校の講演で学生に伝えたいこととして、山内さんが三つあげていたと思います。「出会いを大切に」「体だけでなく心を癒すケア」「心に寄り添う看護」と言っていましたが、その思いが彼女の看護の姿に、そのまますっきり表れていたのではないかと思います。

山内さんの性格がそうさせているのか、彼女の周囲には人柄の良い方が多いような気がします。山内さんと接しているとそうなるのか、不思議が力を持った人ではないかと感じました。

ひとつ残念だったのは、抗ガン剤治療の紹介が少なかったことです。私の義理の母が抗ガン剤治療を受けていましたが、凄く大変なのです。そのような場面をあえて入れなかったのか、病気と闘うところがあまり画面に出ていなかったのも、少し分かりにくかったような気がします。抗がん剤治療というのはかなり大変らしく、義理の母を見舞いに行くと本人の形相が変わって見えるくらいに大変な治療だったようで、恐らく山内さんも経験されているのだと思いますが、そういったところが少し足りなかったかなと思いました。

坂井さんのナレーションは、あまり余計なことをしゃべらないで、声の質も良く、とても良いナレーションだったと思います。

最後に「看護する側とされる側」、自分自身がガン再発の不安と向き合いながら、病気と闘う患者さんを支えたいと思っている純真ナースに、心からエールを送りたいと感じました。

○中村委員長

ありがとうございました。中原委員、お願いいたします。

○中原委員

当初私は、友人、知人がガンで亡くなるのを目の当たりにしているので、正直この番組をあまり見たくないと思っていました。どうしても見なければならぬことになって、どうせなら早めに見ようと思い、実際の放送日にこの番組を見ました。

感動した部分は、皆さんがお話された通りです。山内さんの人柄がこの番組をもたせているというか、淡々とした部分がなにか痛々しい感じで画面から伝わってきました。

山内さんは、以前に盛岡市の広報誌で紹介されていたので、ある程度予備知識はありましたが、動く映像の強みということで、やはり強く訴えるものがありました。

番組としては、非常に見る者に訴えるものがありましたし、感動がありました。でも山内さんがあまりにも明るく見えたり、看護師としての務めを一生懸命なさるところなど、カメラがあるからよほど無理して振舞っているのではないかと、などと余計な考えを持ってしまいました。だとすればちょっと気の毒だな、などと思いつつも、山内さんに惹きつけられていったのです。そのあたりはカメラワークが良かったのか、本当に苦しいところを映さなかったということもあるのかなと思いました。

実際の放送を見て良かったことは、県の対ガン協会のコマーシャルが5回入っていて、それがまことに番組にマッチしていたことでした。これならば対ガン協会も、まさにわが意を得たりというところでしょう。番組とコマーシャルが連動していて非常に良かったと思いますし、私は放送を見ていて思わずなるほどと思いました。特に乳ガンについては、今の若い人の健診の受診率が低いということで、問題になっていますね。この番組によって、ガンの早期発見が強く訴えられたのでは、と思います。

その放送当日の夕方、この番組の後にめんこいテレビのニュースがありました。その中に、ガンのシンポジウムのニュースがあつて、そのシンポジウムに山内さんが出席していましたが、ニュースの映像に山内さんが映っていないのです。番組は独立していて良いのですが、山内さんを取り上げた番組の後に、がんのシンポジウムのニュースを流す訳ですから、せっかくの機会になぜ連動させて山内さんをニュースに出さなかったのか、ちょっと気がかりでした。

もうひとつはお父さんが前立腺がんにかかって、山内さんが看病していましたが、お父さんのがんについて、その後一切出てこなかったですね？

○一戸報道局長

その後触れないで、最後に実家で新聞を読んでいる映像を見せただけです。

○中原委員

お父さんはその後どうなっているのだろうと思っていました。余計なことではなくて、ガンが日常身近なことであるだけに、この番組の持つ意味と社会に訴える想いを考えると、いささかひっかかった部分でした。

ただ間違いなくこの番組は多くの人に見て欲しいし、皆に見せてあげたかった番組であったということで、終わりたいと思います。

○中村委員長

どうもありがとうございました。次は村上委員からお願いいたします。

○村上委員

先ほどの一戸さんのお話では、一枚の講演会のパンフを手にとられて、そこから既にこういった構想をお持ちだったということで、よほどなにか心に響くものがあった、説得力のようなものが最初からあった、そういうものが形になった番組だったのではないかなと思います。一戸さんのお話を聞いて、非常に腑に落ちた気がしました。

最初番組を見始めたときは、どういう展開になるのか、同じ女性ですし、やはり自分に重ね合わせて考えるところもあるのではないかと考えていました。一戸さんのお話では、非常に淡々とストレートに作る演出を心がけたとのことですが、過剰な感情の移入ですとか、思い込みとか、そういったものがあまりなく見ることができたと思います。

ちょっと不思議な感覚を感じたのは、ある意味テンポの良い番組では時間が早く感じますよね、番組があつという間に終わったという感じになるのですが、この番組は1分は1分のまま、そのままの時間が流れていくという印象を持ったことでした。撮影中は殆ど山内さんの胸につけたピンマイクで声を拾っていたように思うのですが、その言葉が遠景を撮っていても、声だけがとても近くリアルに聞こえてきました、エンディングは、先ほど菅原さんが廊下のシーンが凄く良かったと仰っていましたが、声だけが残って余韻がありました。殆ど音楽もなく、山内さんの言葉とナレーションの言葉、非常にシンプルと言えばシンプルすぎるくらいの音だったと思うのですが、そういう作り方によってシーンごとに余韻が残って、そのままの時間が流れていくという印象につながったように思います。

山内さんは本を書かれていて、その本は増刷になって非常に評判になっているのですが、取材を始めた頃は、本の執筆にとりかかっていたのですか？

○一戸報道局長

とりかかっておられまして、ちょうど自費出版の段階でした。今は全国出版されています。

○村上委員

本のなかでは、山内さんは非常にご自分を客観的に見られていたり、揺れ動く気持ちや、不安をかなりストレートに書かれています。番組では、そうではない姿というか、非常に元気で前向きで、表面的には頑張っていらっしゃるところ以外の部分を見せていただくことができました。山内さんご自身はやはり凄く可愛い人ですよ、そういった表情や、一生懸命な感じを見せていただくことができました。お書きになった本も、いろいろところで紹介されていますが、本と番組と併せて、ますます山内さんの病気を通してのいろいろな経験や想いが伝わっていけば良いと思います。さらにこういう方が岩手で、盛岡で仕事をされているということが、地元の人にとっても非常に勇気づけられることだと思いました。

○中村委員長

ありがとうございました。それでは東海林委員からお願いいたします。

○東海林委員

私はタベ、山内さんのブログを探そうと思ってパソコンを開いていたのですが、ブログのタイトルを忘れたので「ナース・乳ガン」で検索をしました。そうしたら、山内さん以外にも乳ガンと闘いながらナースとして、看護師として働いていらっしゃる方がおられるんですね。他にも同じような方がいるのだなと思いました。山内さんが特別な訳ではないということをタベ私は認識したのですが、山内さんがドキュメンタリーの主役になる何かがあるということを私は番組を見て感じました。それは、カメラワークというのでしょうか、時々言葉を発していない山内さんの顔のアップが番組の随所に盛り込まれているのですが、そういう何も話していない顔のアップから、私たち視聴者が感じることのできる、何かプラスアルファのようなものが伝わってくるようなつくりになっていたな、ということ強く感じました。

ウェディングドレスの姿で写真を撮るシーンでも「似合うね、私たち」と言って笑わせてから、その映像のあとに2人が手袋をしたまま手を重ねているシーンがアップになり、私はあのシーンで思わずぐっと胸が熱くなってしまいました。いろいろな小賢しいテレビの演出方法を使うのではなく、本当に山内さんの人柄がよく伝わるつくりになっていたと思います。

山内さん自身のブログですが、こうして誰でも見られるという事がとても身近で素晴らしいなと思います。6月1日のブログのなかに「昨日は私のドキュメンタリーの番組のオンエアがありました。思い出して涙が出てしまいました。」という文章を彼女は書いておられました。たくさん思いがあってこの番組作りに山内さんは協力してくださったと思うのですが、この番組によって私たち自身が勇気を貰うことができました。

私も乳がん健診は受けたことはあるのですが、毎年行かなければならないと頭では分かっているながら、どこも痛くないので仕事を休んでまで行かないのです。でもこの番組を見ることによって、家族もいるのだから行かなくては、と改めて考えることができました。

テレビというと視聴率も大事だと思いますし、ローカル制作のバラエティー番組も良いとは思いますが、こういう素晴らしいドキュメンタリー番組でぜひぜひ視聴率をとってもらいたいですし、もっとたくさんの方に見てもらいたい番組ではないかと思いました

○中村委員長

ありがとうございました。それでは続いて久慈委員、お願い致します。

○久慈委員

私の後輩が乳がんで亡くなっております。3歳の子供とご主人を残して死んでしまったということがありまして、実はこの番組を見るのはいやだなと思っておりました。

ところが、いわゆるお涙頂戴ではなく、一戸さんが説明したとおり淡々とした番組で、泣かせるものではないという作り方に、これは意図的にやっているのだなということを感じましたし、すごく共感いたしました。

今「余命一ヶ月の花嫁」というのをやっています。私はまだ見ていないのですが、泣くことで共感するというものではないかと思います。泣くことで共感しなくとも、非常に共感が得られるような番組だったと思います。

音楽を全く使わないという手法はすごいなと思いました。主人公になる人の魅力がなければそういう手法は使えないだろうなと思いましたし、人間はここまで強くなれるのかと思ひ

ました。あとはもっと彼氏との関係を教えて欲しいと随分思いました。結婚していないのに、結婚式の写真を撮るというのは「世界の中心で愛を叫ぶ」でもやっていたなとか、すごくなるほどと思ったのですが、その意図とかそういったことをお聞きしたかったのです。お二人は結婚されていないのですよね。

○一戸局長

まだご結婚はされていませんが、その方向でお話は進んでいて、今年の秋にという話しはお聞きしています。

○久慈委員

なぜ結婚されないのか、ずっと考えていて、私がある立場だったらすぐに結婚しようと言えようかな、などいろいろ考えながら見ていました。ですから番組を見終わって、私は全然泣けなかったというか泣けなかったのですが、私も頑張らなきゃなと強く思いましたし、なるほどこういう番組はすごくいいなと感じました。

NHKにも作れないようなやり方なのだろうと思いましたが、民放っぽい番組にも見えなくて、その中間のような作り方に思いましたので、ぜひ今後もドキュメンタリーを頑張って作っていただきたいと思います。

○中村委員長

ありがとうございました。続いて吉田委員、お願い致します。

○吉田委員

私はドキュメンタリーが非常に好きなので、興味を持って見ましたが、まさにドキュメンタリーそのものだなという印象でした。先ほどの一戸さんの説明でなるほどと思ったのですが、最初から全くの色づけなし、無駄な演出なし、そのまま、これが一番良かったと感じました。最初からずっと引き込まれて見ていました。

今回のテーマは重いのですが、暗さが全く番組のなかになかった、というのがまずひとつです。

先ほど、どなたか仰っていましたが、ナレーターに坂井さんを起用したところが最大の光だったなと思いました。ナレーションが非常に聞きやすかったですね。

それから印象に残っているのは、それぞれの場面での山内さんの一言一言の言葉の重さです。例えば「ガンが憎い」と言ったり、いろいろな意味で言葉の重さを感じました。闘病生活をして、ほんとうの辛さや苦しみや不安を体験した人でないと、なかなかこういうことは言えないと思うのです。特に岩泉の実家に戻って家族団らんのなかでの親に対する感謝、あるいは周囲の人に対する感謝がある訳ですが、なるほど感謝というのは同じ言葉の中にもこんなに違いがあるのだな、ということを感じました。

良く言われることで、人間というのは言葉以上に、仕草や表情にその人間が出るのだそうですが、テレビの一番の良さというのはそういう場面だと思います。家族のなかで、お父さんにしても、お母さんにしても、娘さんがああいう風に苦しんでいるときに、もう切ない、やるせないという表情がなんとも痛ましく画面から感じて、その場面が非常に良かったと思います。もちろんカメラの撮り方も、お上手だなという感じがいたしました。

自分も、心の弱さと言ったらいいのか、ふがいなさと言ったらいいのか、毎日いろいろなことで悩んだり怒ったりしたときにこういった番組を見ますと、なんとくだらないことなのだろう、こんな立派な方がいらっしゃるのにと思うわけです。つまり勇気を貰ったのですね。非常にこれは大きかったと思います。

それから、今は不況だとか時代の背景が暗いですね。そんななかにありまして、本当の幸せとはなんぞやということを番組が教えてくれたのです。山内さんの言葉の中にも「もう平凡な生活でいいんだ。」というのがありましたが、その言葉が全てを物語っていて、ドキュメンタリーの一番良いところが出ていると思いました。先ほど一戸さんが、生きていることを考えるきっかけになればと仰っていましたが、そのとおりでしたね。

きっかけは一戸さんが山内さんの講演のパンフレットを見て、これを取り上げたいと思ったというお話がありましたが、私はそこに拍手を送りたいと思いました。

○中村委員長

ありがとうございました。続いて椎井副委員長、お願い致します

○椎井副委員長

私はこの番組審議会の委員になって間もなく1年になるわけですが、大体のテーマが大変楽しい番組か、明るい番組が多くて、それなりに素晴らしい番組を審議してきたとは思っていますが、今回は楽しい、面白いということではなくて、いろいろ考えさせられました。そ

れから先ほどお話が出ましたけれど、私自身もこの番組から大変元気を与えて貰ったと思っています。

テーマからすると、暗い重苦しい内容で終るのだろうか、と思っていましたが、全般を通じて非常に明るく、前向きな内容だったと思います。山内さんの明るさが、かえって私に彼女の健気さとか、あるいは逆に辛さとか、強い人だなという想いを、強く感じさせたのだと思います。

病気と闘いながら、自分の看護師としての役割、これをしっかりと見据えながらも全力で駆け抜けようとしている彼女の姿に感動した次第です。

私は番組を見て、ずっと若い頃に仙台放送で草柳大三さんを使った「サンデートーク」という番組を会社で担当していたことを思い出しました。草柳さんは当時こういったドキュメンタリー番組を見て、ミーニング・オブ・ライフだとよく言っていました。テレビの世界というものは、要はミーニング・オブ・ライフだ。人生をどう生きるか、ということを常に追求しているのだ、ということをよく言っていたことを思い出しました。

この番組を見ても、人間生まれたからにはその与えられた人生をいかに有意義に過ごすか、特に人生どう生きるかということが最大のテーマだろうと思うのです。そういう意味でこの山内梨香さんの場合も、世の中のため、周りの人のために役に立つ人生を送ることが、多分共通した答えなのだろうと思います。

人生をどう生きるかということを考えるうえでこの番組は大変良い教材なのではないかと思いました。

実はこの番組を見る前に、ピンクリボンの会の岩手支部が設立されまして、私どもの会社の社屋のタワーのライトアップの照明を、ピンク色にして欲しいと会から要請されました。ピンクの照明にするのは難しいと思い、この番組を見る前はいかにして断ろうかと実は考えていたところでした。その後、私だけでなく当社の管理職にもこの番組を見てもらったのですが、今度はなんとかピンク色にしたいという発想に変わってきました。ピンク色のライトアップが出来るかどうかはまだ分かりませんが、そういう意味で、私だけでなく皆に良い影響を与えてくれたと思いました。

○中村委員長

ありがとうございました。私にとって初めての審議会でしたが、最初からかなり重いテーマの番組で、少し面食らったところがございます。

実を言うと本来ならこういう番組を、とても見ていただけないのです。こういう番組の場合は、いつも家内と喧嘩をしながら「俺は見ないぞ、こういうのは見ないよ。」と言っているのですが、今回はやむなく見させていただきました。

内容につきましては皆さんが仰ったとおり全く同感であります。山内さんが病気に苦しみながらも明るく自分の仕事を淡々とこなして、患者さんにも明るく接していくという、非常に際立った作りのドキュメンタリーだと思います。

ちょっと私の感想は辛口になってしまうかもしれませんが。内容的には全く文句のつけどころがない訳ですが、全編を見てこの番組で何を言いたいのかな、というのをまず感じました。

先ほど一戸さんのお話を伺って、これは見ている人それぞれが何かを感じればいいのか、という気もいたしましたし、ドキュメンタリーで内容も内容ですから淡々と描くということに専念されたのかなと思いました。一戸さんのお話もそういうことでしたので、そのように感じておりましたが、全体にむしろちょっと長く感じました。もう少しテンポ良く描いても良いのではないだろうかと思いました。

一番気になったのは、タイトルの前にいくつかのシーン出てきましたが、同じものが後でまた出てくるのですね。最近のテレビの手法は、最初になにかを出して、見てくれという感じなのですが、ドキュメンタリーに関してはああいうのが先に出てくると、後で同じシーンが出てきたときに、印象が薄れてくるのではないのでしょうか。さっき見たシーンだなという感じになってしまいます。最初はもっと別な入り方でタイトルに入っていったほうが良いのではないかという気がしました。

それからナレーションなのですが、先ほどから他の委員の方々からはお褒めの言葉もあったのですが、私はちょっと違って暗い感じがしました。淡々としていてこの番組にあまりにもマッチしすぎていたように思います。もう少し彼女の明るさに合うような、暗いナレーションではないほうが良かったのではないかなと、個人的には思いました。

全編を見させていただいて、最後のシーンはどなたかも言っておられましたが、明るい感じで終わっていたのでほっとしました。この番組は、山内さんにとって非常に苦しい毎日を送っている最初のあるところから、途中までの間を切り取ってドキュメンタリーにして仕上げている訳です。見ている方に見れば、ああやって頑張っていることによって山内さんが病気の進行を遅らせている、というような印象を持ちながら番組を見ていく訳ですが、最終的には彼女の病気はどうなるのだろうかという気になります。気になる終わり方をしてしまうのもひとつの意図なのは理解できますが、出来ればこのまま彼女はああいう風にやっていっ

て、良い方向に向かっているという印象を視聴者に持たせていただいて番組が終れば、私みたいな見方をする人は救われたかなという感じはいたしました。

それにしても審議会に参加した最初から素晴らしい番組を見ることができて、大変感動をいたしました。まずはありがとうございますと最後に申し上げたいと思います。

次に、欠席委員からのレポートを事務局からお願いいたします。

○事務局

齋藤純委員からレポートが届いております。

○齋藤純委員レポート

私は両親の親族を癌で失っているのです、間違いなく癌の家系だと思います。伝染病と違い癌は自分のからだのなかから発生するものなので、自分を殺す悪い細胞だとしても、それは私のからだの一部だと今から自分に言い聞かせています。

が、いざ癌を宣告されたときに、そのように冷静に受けとめることができるかどうか、実はまったく自信がありません。しかし、この番組によって、少しは度胸がついた（別の言い方をするなら、勇気を与えられた）ような気がしています。

「患者さんのほうが大変」という山内さんに、「おまえさんのほうが大変だろうに」と涙が出てきました。ツール・ド・フランスで前人未到の（そして、今後絶対に塗り替えが不可能といわれる）七連勝を達成したランス・アームストロングは、生存率2パーセントという癌を克服した選手です。山内さんにもそのパワーがあるんじゃないでしょうか。

重いテーマの、ある意味、沈鬱になりがちな番組なのに、山内さんの人柄を反映して明るい番組になっていた。ナレーションの人选がよかったおかげだと思います。

また、病院内の取材という難しい番組を撮ったスタッフに大きな拍手を送りたい。たとえば、リサちゃんとのシーンは、信頼関係がないとできないことです。

本といえば、もし誰かが、山内さんのようなナースを主人公にした小説を書いたとします。その小説はたぶん出版されないか、されてもケチョンケチョンにけなされます。「こんな人がいるわけがない」と。事実は小説よりナントラヤです。

ピンクリボンの活動がチラッと紹介されましたが、日本は乳ガンの死亡率が高いそうです。そういうデータもほしかった。（ところで、市立病院勤務なのに、医大で検査なんですね。）

○中村委員長

ありがとうございました。では本日の番組審議会をこれで終了いたします。

○事務局

今回の審議会の模様は、6月20日（土）朝4時42分から「めんこいテレビ番審リポート」として放送いたします。次回は7月14日（火）を予定しております。本日はありがとうございました。

7. 審議機関の答申又は改善意見に対してとった措置

特になし

8. 審議機関の答申意見概要を公表した場合におけるその公表内容、方法及び年月日

*平成21年6月10日（木）産経新聞 東北版

*平成21年6月20日（土）午前4時42分から4時45分まで「めんこいテレビ番審リポート」内で放送

*据え置き書類を作成し、本社受付に置き一般の人々が自由に閲覧できるようにした

9. その他の参考事項

特になし